松江市文化財調査報告書　第 183 集

一般国道 431 号（野原工区）防災安全交付金（交通安全）工事に伴う発掘調査報告書

礫岩古墳（れきいわこふん）

平成 30(2018) 年 3 月

島 根 県 松 江 市 教 育 委 員 会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

松江市文化財調査報告書　第 183 集

一般国道 431 号（野原工区）防災安全交付金（交通安全）工事に伴う発掘調査報告書

礫岩古墳（れきいわこふん）

平成 30(2018) 年 3 月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

例　言

1. 本書は、平成 29 年度に実施した一般国道 431 号（野原工区）防災安全交付金（交通安全）工事に伴う礫岩古墳（れきいわこふん）の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、島根県松江県土整備事務所から松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。
3. 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

   （名　称）　礫岩古墳（れきいわこふん）

   （調査地）　島根県松江市野原町字礫岩（しまねけんまつえしのばらちょうあざれきいわ）586 番地

4. 現地調査の期間

   平成 29 年 10 月 25 日～平成 29 年 12 月 19 日

5. 開発面積及び調査面積

   開発面積：675.0㎡

   調査面積：178.0㎡

6. 調査組織

依 頼 者	島根県松江県土整備事務所		
主 体 者	松江市教育委員会	教　育　長	清水　伸夫
【平成 29 年度】	現地調査及び報告書作成業務		
調査指導	島根県教育庁　文化財課	調　整　監	椿　　真治
事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部　　長	藤原　亮彦
	〃　次　長（まちづくり文化財課長兼務）		永島　真吾
	〃　まちづくり文化財課		
	〃　〃　専門官（埋蔵文化財調査室長兼務）		飯塚　康行
	〃　〃　埋蔵文化財調査室　調査係	係　　長	赤澤　秀則
	〃　〃　〃　〃	主　　幹	川上　昭一
	〃　〃　〃　〃	学 芸 員	三宅　和子
	〃　〃　〃　〃	嘱　　託	門脇　誠也
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理 事 長	清水　伸夫
	埋蔵文化財課	課　　長	曽田　健
	調査係	係　　長	川西　学
	〃　〃	調 査 員	江川　幸子（10 月 25 日～ 11 月 7 日）
	〃　〃	〃	廣濱　貴子（11 月 8 日～ 12 月 19 日）
	〃　〃	調査補助員	北島　和子（10 月 25 日～ 11 月 7 日）
	〃　〃	〃	門脇　祐介（11 月 8 日～ 12 月 19 日）

7. 調査に携わった発掘作業員

　岩成敏章、岩成博美、加藤恵治、坂本玲子、中村慎一、福田紘治

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下の者が行った。

　金坂昇

9. 本書の執筆は、第 1 章を松江市埋蔵文化財調査室が、第 2 章～第 4 章を廣濱が執筆した。また、編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て廣濱が行った。

10. 本書における土器区分、分類、編年は以下を参照した。

［須恵器］

大谷晃二　1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌　第 11 集』島根考古学会

［陶磁器］

九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念－』

［瓦］

花谷浩 「出雲における中近世の瓦と松江城築城期の瓦」松江市　2017 『松江市歴史叢書 10 松江市史研究 8 号』

11. 本書に掲載する土層は、『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修:財団法人日本色彩研究所　色票監修に従って表記した。

12. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。また、レベルは海抜標高を示す。

13. 本書における遺構の略号は以下のとおりである。

　SK：土坑

14. 本書で掲載した遺構図の縮尺は､各図に縮率とスケールを明記した。遺物実測図の縮率は原則 1/3 とし、断面は、陶器を白ヌキ、須恵器・磁器を黒塗りで示した。また、瓦の縮率は 1/4 としている。

15. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は、松江市教育委員会で保管している。

目　次

例言

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　位置と歴史的環境 …… 3
第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 4

第３章　調査の方法と成果 …… 7
第１節　調査の方法と概要 …… 7
第２節　遺構 …… 10
第１項　古墳 …… 10
第２項　SK01 …… 10
第３項　竪堀１・２ …… 10
第４項　加工段 …… 12
第３節　遺物 …… 12

第４章　総括 …… 16

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図　開発範囲図…… 1
第 2 図　調査範囲図…… 2
第 3 図　旧野原村字限地図…… 3
第 4 図　周辺の遺跡分布図…… 6
第 5 図　調査前地形測量図…… 7
第 6 図　調査区全体図…… 8
第 7 図　土層断面図…… 9
第 8 図　礫岩古墳地形測量図…… 11
第 9 図　SK01 実測図 …… 12
第 10 図　竪堀 1・2 実測図 …… 13
第 11 図　加工段実測図…… 14
第 12 図　礫岩古墳出土遺物実測図…… 15
第 13 図　礫岩古墳周辺の山城跡分布図…… 17

写 真 1　礫岩古墳から大山を望む（南西から）…… 3
写 真 2　才ノ神と礫岩古墳（南西から）…… 3

写真図版目次

図 版 1　礫岩古墳遠景（南から）、礫岩古墳調査前全景（南西から）
図 版 2　墳頂部完掘状況（北西から）、南西側斜面完掘状況（西から）
図 版 3　北東側斜面完掘状況（西から）、竪堀 1 完掘状況（北東から）、
　　竪堀 2 完掘状況（北東から）
図 版 4　SK01 完掘状況（北西から）、竪堀 1 南北土層断面（南東から）
図 版 5　竪堀 1 東西土層断面（北東から）、加工段土層断面（北西から）
図 版 6　礫岩古墳出土遺物

第 1 章　調査に至る経緯

一般国道 431 号は、島根県出雲市の国道 9 号を起点とし、島根県松江市、鳥取県境港市を経由し鳥取県米子市内の米子自動車道を結ぶ幹線道路である。本路線は宍道湖・中海の北側を縦走するものであり、出雲・松江地方の大動脈として重要な役割を担っている。多くの自動車が往来するため南側に歩道が整備されているものの、幅 1.5m 程度と十分な幅が確保できていない。また、家屋が連担している北側には歩道が整備されておらず、歩行者の安全確保が必要とされてきた。このため、島根県松江県土整備事務所では、歩行者の安全な通行を確保するため道路両側の歩道を整備することとした。

この事業に先立ち、平成 28 年 7 月 14 日、松江県土整備事務所から松江市埋蔵文化財調査室に、野原町内の 380m 区間における埋蔵文化財の有無確認についての依頼書が提出された。これを受け、同年 10 月 13 日に対象地の分布調査を実施したところ、2 カ所の古墳推定地を確認したため、南西側の丘陵（野原町字礫岩 586 番地）に T1、北東側の丘陵（〃 356 番地）に T2･3 を設定して遺跡の有無確認のための試掘調査を実施することとした。

第 1 図　開発範囲図 (S=1:5,000)

試掘調査は、同年 12 月 19 日・20 日に実施している。随時トレンチの増設と拡幅を行い、最終的には当初の 2 倍近い面積を調査している。この結果、北東側の丘陵では遺跡と認められるものは検出できなかったが、南西側の丘陵からは性格不明の落ち込みを検出したため、当地の小字名を取り、『礫岩古墳』として文化財保護法上の手続きを行った。

この後、遺跡保護の協議がなされたが、計画変更は困難との結論に達し、平成 29 年 10 月から松江市教育委員会が主体となり、本発掘調査を行なうこととなった。

第 2 図　調査範囲図 (S=1:500)

第 2 章　位置と歴史的環境

第 1 節　地理的環境（島根県・松江市位置図、第 3 図）

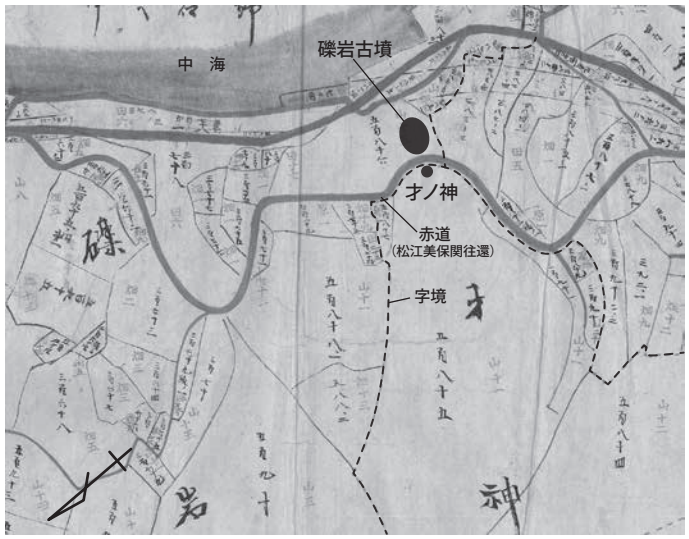
礫岩古墳は、島根県松江市の北東部、松江市野原町字礫岩 586 番地に所在する。島根半島北西側丘陵から派生した丘陵突端に位置し、東側は中海に面している。調査地の南東側には大根島があり、その先に、『出雲国風土記』に「火神岳（ほのかみのたけ）」と記載されている鳥取県の大山（伯耆富士）を望むことができる。また、中海を隔てて対岸の米子市や安来市、その背後に連なる山々まで広く眺望できる風光明媚な場所である。

調査地の標高は最高所で 26m を測り、南東側は道路建設時に丘陵の端部が削られ崖となっている。背後の丘陵とは赤道によって途切れてはいるが、緩やかな傾斜で丘陵上方へ続いている。赤道の北西側には才ノ神が祀られ、周辺に円礫や石塔の一部、寛永通寶が確認される。また、赤道の近くには家が建っていたと思われる平坦面がみられる。この赤道は、明治 22 年の『松江市土地台帳付属地図（島根郡野原村字限地図）』をみると、野原村の礫岩と才ノ神の字境の峠に位置していることがわかる。また、『島根県歴史の道調査報告書第 10 集　歴史の道調査報告書』に記載されている「松江美保関往還」の一部に比定され、近世の道と思われる。

現在、調査地周辺の丘陵には柿畑が多く、平地には水田がみられる。

写真 1　礫岩古墳から大山を望む（南西から）

写真 2　才ノ神と礫岩古墳（南西から）



＊ 明治 22 年 1 月調整　松江市史料編纂課蔵の『松江市土地台帳付属地図（島根郡野原村字限地図）』に加筆

第 3 図　旧野原村字限地図（礫岩古墳周辺を拡大）

第２節　歴史的環境（第４図）

本遺跡周辺には多くの遺跡が存在し、特に丘陵尾根上や縁辺部で多く確認されている。以下、第２節では、中海西岸における本遺跡周辺の遺跡についてその概略を述べる。

旧石器時代　旧石器時代の遺跡は確認されていないが、新庄町新川の河川改修工事の際にルヴァロア技法で作られた尖頭器が採集されている[(1)]。この尖頭器は、後期旧石器時代前半もしくはそれに先行する時代と考えられている。

縄文時代　中海の沿岸には縄文時代の遺跡が多い。本遺跡北東側に位置する夫手遺跡（34）からは、縄文時代早期から晩期の土器や木製品が多く出土し、なかでも漆液容器は、縄文時代前期初頭において漆工文化が存在していたことを示すものとして貴重な資料である。また、同遺跡や柳瀬遺跡（33）では、どんぐりの貯蔵穴が検出されている。この他に、寺ノ脇遺跡（44）、権田作遺跡（43）、荒船遺跡（49）で土器や石製品が出土している。中海沿岸の低湿地域は、背後が山、前方が中海という集落に適した場所が少ない地域である。しかし、豊富な魚介類を捕獲できること、北側の山地で木の実などを採集できることから人々にとって良好な生活環境であったと思われる。

弥生時代　集落跡では、本庄平野の北東側に位置する的場遺跡（12）や連行遺跡（5）から、弥生時代中期から後期の竪穴建物が検出されている。墳墓では、連行遺跡の南側に客山墳墓群（6）がある。２基の墳墓のうち１号墳は弥生時代終末に位置づけられ、器台や標石が出土している。弥生時代の遺物が出土した遺跡には、権田作遺跡や夫手遺跡、寺ノ脇遺跡、京殿遺跡（26）がある。これらの遺跡をみると、縄文時代の遺跡が含まれ、人々の生活が弥生時代まで連綿と営まれていたことがわかる。

古墳時代　古墳時代になると中海周辺の丘陵には多くの古墳が築造され、本庄平野や長海平野縁辺の丘陵に多く所在している。前期の古墳では、中海西岸に所在する八日山古墳群（21）がある。その１号墳は一辺 23.5ｍの方墳で、三角縁神獣鏡が出土しており、有力者の墓と考えられている。前期の古墳では他に、刳抜き木棺や箱式木棺が出土した春日山古墳群（42）や藤田古墳群（32）の２号墳、杉ヶ橈遺跡（51）の１号墳がある。中期の古墳では、長海平野縁辺に前方後円墳や前方後方墳が５基集中して分布している。渕切古墳群（37）の１号墳は全長33.1ｍの前方後円墳、２号墳は全長20.5ｍの前方後方墳である。また、藤田古墳群の１号墳は全長33.5ｍの前方後方墳、２号墳は全長28.6ｍの前方後円墳、堀越古墳群（41）の４号墳は全長23.8ｍの前方後円墳である。これらの中規模古墳の被葬者は、古墳の規模や形からして単に長海平野のみを治めていたとは考えにくく、おそらくもっと広範囲を支配していた有力者であった可能性が高い。次に、本庄平野縁辺丘陵では、一辺が10ｍ前後の方墳が多い。九乳文鏡や玉類が出土した客山古墳群（19）の１号墳や杉ヶ橈遺跡の古墳、的場古墳群（11）の２・５・６・11号墳が所在している。後期古墳では、横穴式石室の一部が確認された堀越古墳群の７号墳や善尾古墳（40）、埴輪片が出土した客山古墳群の２号墳がある。古墳については詳細な調査が行われていないため、時期など不明確なものが多く、他にも藤田南古墳群（31）や荒船古墳群（16）、たたら古墳群（9）などが所在する。古墳時代の終末になると、横穴墓が丘陵斜面に築かれ、ガンダ横穴群（30）や鍛冶床南横穴群（22）、梅廻横穴群（45）、連行遺跡の横穴が確認されている。連行遺跡の横穴は15穴からなり、１号墳から銅装圭頭大刀が出土している。

集落跡では、杉戸遺跡（36）の堆積土から土器や炭化米が出土し、前期中葉から中期の集落跡とされている。他に、善尾遺跡（39）や夫手遺跡、寺ノ脇遺跡から甕や壺などの生活道具が出土していることから、周辺に遺構の存在が窺われる。

古代（奈良時代・平安時代）　733（天平５）年に編纂された『出雲国風土記』に書かれた「国引き神話」によると、当地域は「闇見の国」に位置し、闇見の神が鎮座するとある。この闇見の神が鎮座する神社は現在の久良弥神社であり、『出雲国風土記』では「椋見社」（47）と書かれている。この「椋見社」は、現在の久良弥神社から南西へ約１㎞の谷に位置していた。

『出雲国風土記』に書かれた郷里制で当地域は、嶋根郡の手染郷に属していた。本遺跡から南西側に位置する福原町の芝原遺跡（25）からは、規則性をもって配列された建物跡や墨書土器が確認されている。周辺には、須恵器多口瓶や墨書土器などが出土した東前田遺跡（52）や木簡状木製品が出土した大谷口遺跡（53）、陶硯が出土した京殿遺跡など官衙的な要素を持つ遺跡が多く、総体として郡家遺跡の存在が推定されている。また、『解説　出雲国風土記』には、これらの遺跡の近くを千酌駅までの交通路、枉北道が通っていたと推察されている。他に、『出雲国風土記』には、布自枳美烽跡（24）の記載がみえる。この烽跡は、布自枳美高山、現在の嵩山（331m）であり、狼煙や火を上げて緊急を伝えていたと思われる。

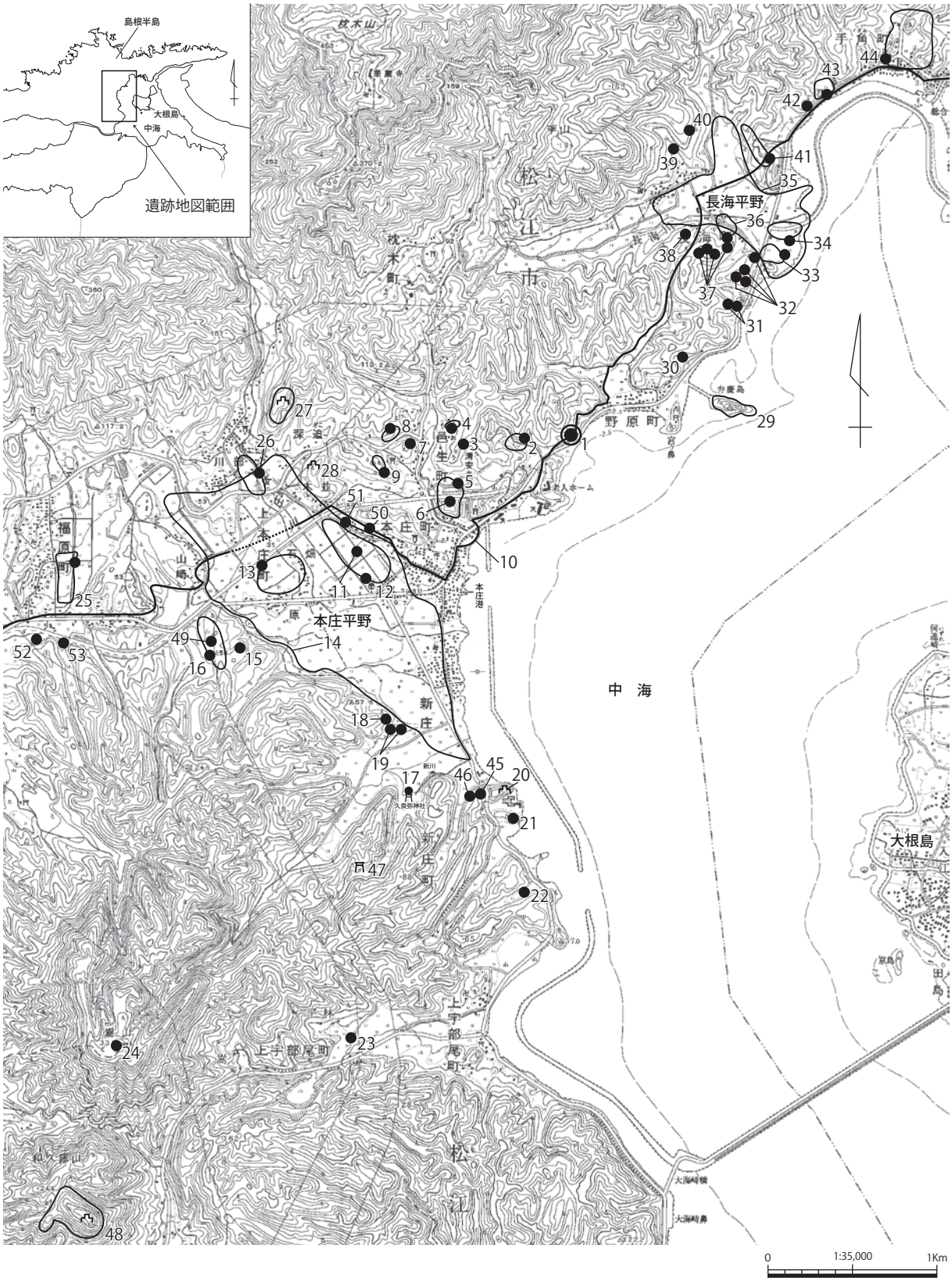
古代の遺跡では、長海条里制遺跡（35）や本庄川流域条里制遺跡（14）、窯跡として四反田窯跡（23）が確認されている。

中世・近世　中世前期において当地域は、隠岐佐々木氏によって支配されており、本庄町にはその菩提寺であった清安寺や佐々木泰清の墓碑がみられる。山城では、本遺跡南西側の本庄町に城山城跡（28）やあん山城跡（27）、新庄城山城跡（20）がある。城山城跡は、隠岐守護であった佐々木泰清の居城で、広い平坦面や郭、井戸が確認されている。あん山城跡は、城山城跡の北西側に隣接し、城山城跡とセットで機能していた可能性が指摘されている。新庄城山城跡では、堀切、土塁が確認されている。また、本遺跡から南西側５㎞には標高262ｍの和久羅山城跡（48）がある。中海から宍道湖、出雲市の簸川平野まで望むことができ、嵩山へ連なっている。尼子、毛利の時代には、城主が度々入れ替わっている。

江戸時代の道として、松江市街から美保関まで松江美保関往還（10）があり、この道は、本庄平野縁辺の丘陵から中海側の本庄港へ、そして中海沿岸を通り美保関に至っている。前述したように、本遺跡北西側の赤道がこの道の一部に比定される。

【註】
（1）『郷土誌ふるさと本庄』の「第二編　第一章」原始から古代へに記載されている。

【参考文献】
加藤義成　1981 『修訂出雲国風土記参究』
島根県教育委員会　1981 「松江・客山古墳群」『島根県埋蔵文化財調査報告書　第Ⅷ集』
島根県教育委員会　1998 『島根県中近世城館跡分布調査報告書＜第２集＞　出雲隠岐の城館跡』
島根県教育委員会　1999 『島根県歴史の道調査報告書第10集　歴史の道調査報告書　松江美保関往還　松江杵築往還巡見使道』
島根県教育委員会　2007 『東前田遺跡・大谷口遺跡・中嶺遺跡・金クソ谷遺跡１区・２区・３区』
島根県教育委員会　2014 『解説　出雲国風土記』
島根県土木事務所　島根県文化財愛護協会　1969 『寺の脇遺跡』
本庄地区町内連合会・本庄公民館　1994 『郷土誌　ふるさと本庄』
松江市教育委員会　1989 『芝原遺跡』
松江市教育委員会　松江市教育文化振興事業団　1999 『松江北東部遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会　松江市教育文化振興事業団　2000 『夫手遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会　松江市教育文化振興事業団　2009 『春日山古墳群・寺の脇遺跡』



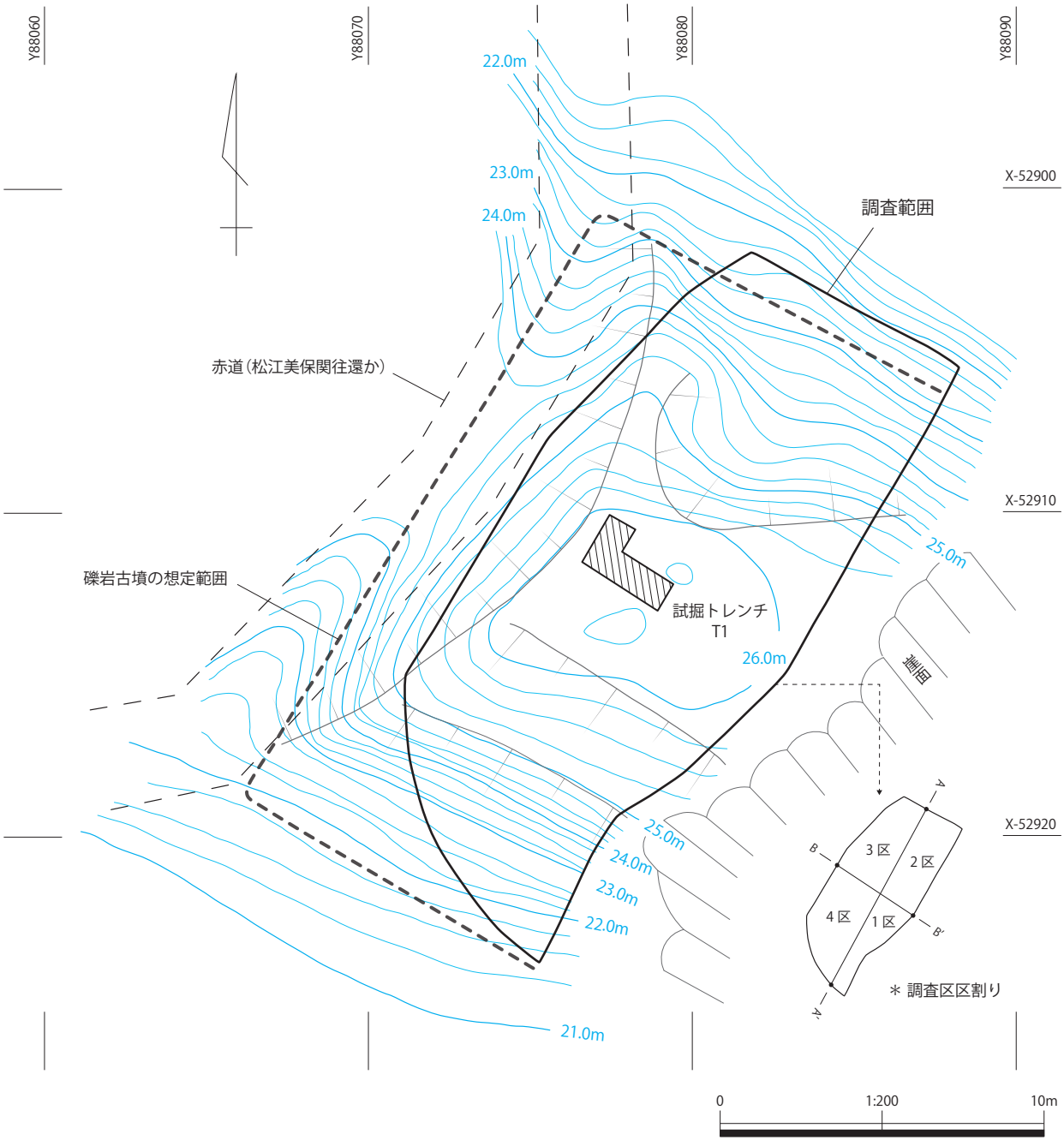
1．礫岩古墳
2．H19 遺跡
3．兵ヶ谷古墳群
4．家床遺跡
5．連行遺跡
6．客山墳墓群
7．上松古墳
8．蓑平遺跡
9．たたら古墳群
10．松江美保関往還
11．的場古墳群
12．的場遺跡
13．原ノ後遺跡
14．本庄川流域条里制遺跡
15．前田遺跡
16．荒船古墳群
17．久羅弥神社遺跡
18．坂山横穴群
19．客山古墳群
20．新庄城山城跡
21．八日山古墳群
22．鍛冶床南横穴群
23．四反田窯跡
24．布自枳美烽跡
25．芝原遺跡
26．京殿遺跡
27．あん山城跡
28．城山城跡
29．弁慶島遺跡
30．ガンダ横穴群
31．藤田南古墳群
32．藤田古墳群
33．柳瀬遺跡
34．夫手遺跡
35．長海条里制遺跡
36．杉戸遺跡
37．渕切古墳群
38．淵古墳
39．善尾遺跡
40．善尾古墳
41．堀越古墳群
42．春日山古墳群
43．権田作遺跡
44．寺ノ脇遺跡
45．梅廻横穴群
46．梅廻古墳群
47．椋見社
48．和久羅山城跡
49．荒船遺跡
50．馬場遺跡
51．杉ヶ橋遺跡
52．東前田遺跡
53．大谷口遺跡

第４図　周辺の遺跡分布図 (S=1:35,000)

第 3 章　調査の方法と成果

第 1 節　調査の方法と概要（第 5・6・7 図）

本遺跡は、丘陵突端に位置し、前述したように中海からその沿岸地域までを広く眺望できる場所に所在する。本調査の範囲は、古墳推定地を対象として実施し、調査面積は 178.0 ㎡である。試掘調査の時点では、1 辺約 21 m 程度の方墳が想定されていた。最初に調査前の等高線や地形測量を行い、次いで墳丘に十字の畦を設定し、南西側調査区から反時計回りに 1 区～ 4 区として調査を始めた。表土（腐葉土）の下には堆積土（第 7 図 2 層）が調査区全体に確認され、表土から 15 ～ 25 ㎝掘り下げた

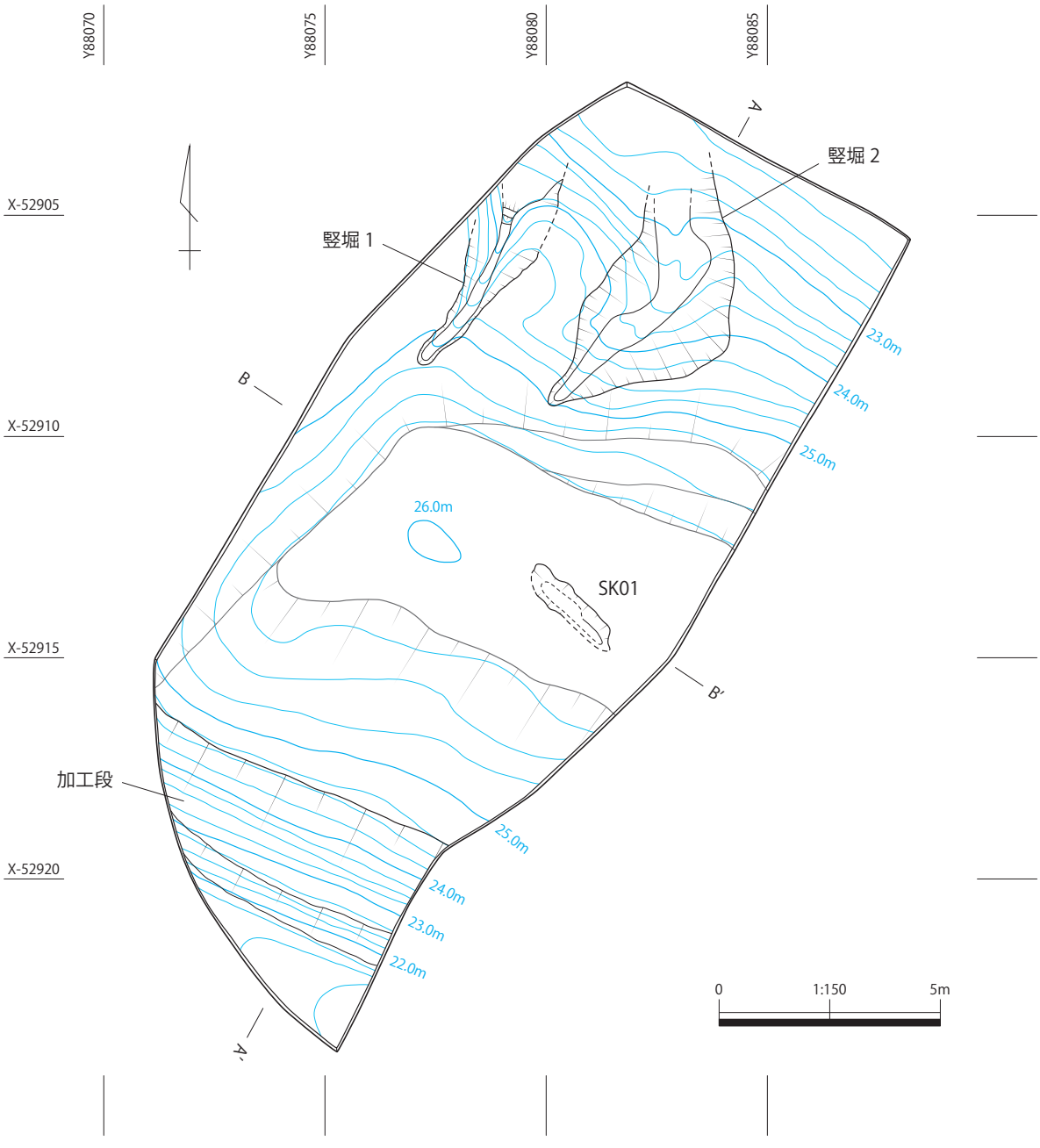


第 5 図　調査前地形測量図 (S=1:200)

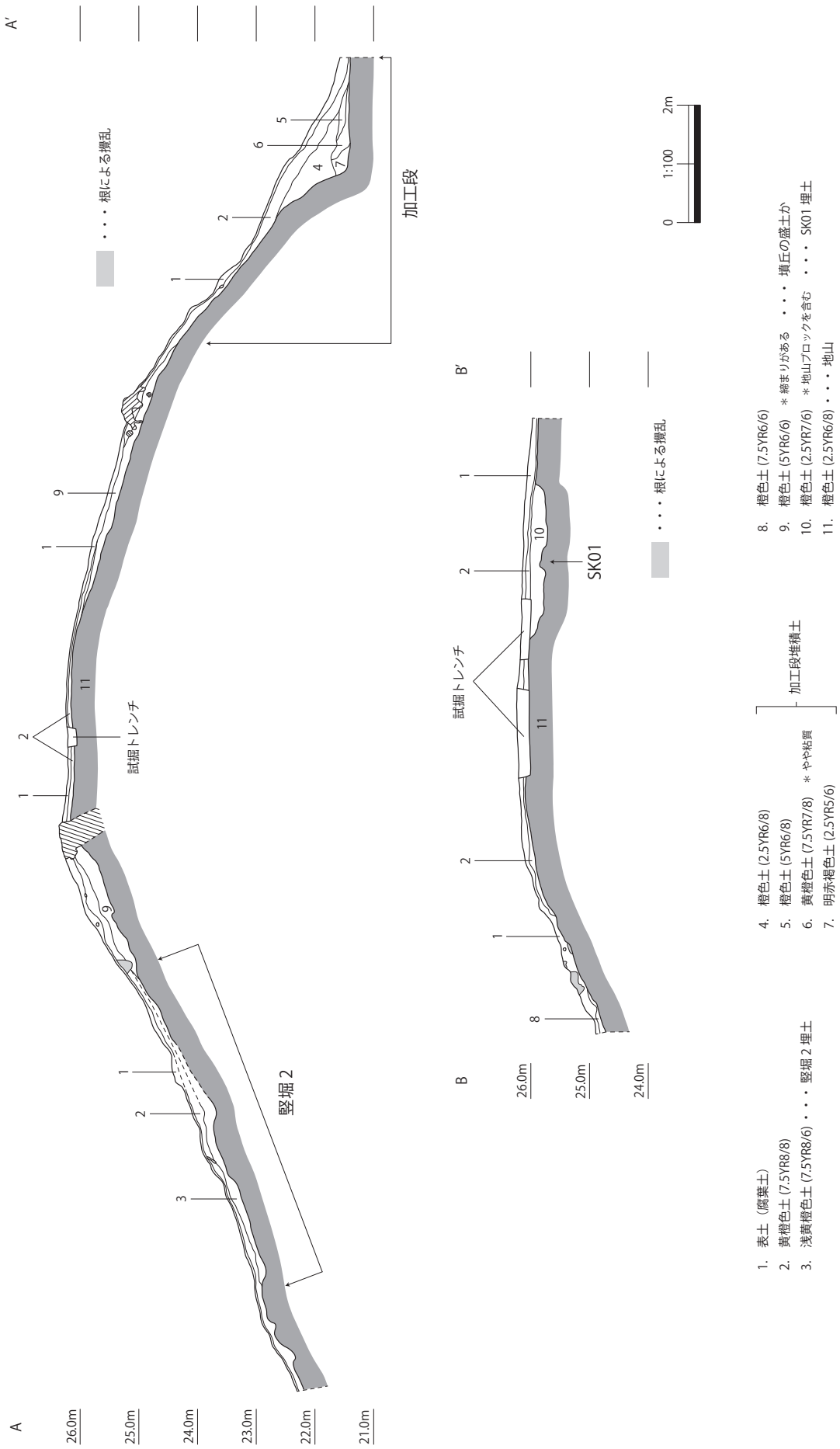
時点で地山に達したが、主体部は検出できなかった。主体部が確認できなかったことから、畦土層断面の実測を行い、畦を撤去した。再度掘り下げ精査を行った結果、浅い土坑（SK01）を検出し、この土坑は主体部底面の可能性も考えられた。北東側斜面には、縦方向に 2 本の溝状の落ち込みが確認され、中世山城の竪堀と考えられた。また、南西側斜面は、急斜面を呈し、下側は L 字状に加工されていた。

各遺構の土層については、第 2 節、遺構で詳述する。

遺構掘削後、遺構実測、等高線測量を行い、調査を終了した。実測については、平面図や等高線測量ではトータルステーションを用い、土層断面はレベルを用いて手作業で測量を行った。図面の方位は世界測地系に準拠した座標北を基準としている。



第 6 図　調査区全体図 (S=1:150)



第 7 図　土層断面図 (S=1:100)

第２節　遺構

第１項　古墳（第８図）

本古墳は、標高26ｍの北西から南東に派生する丘陵尾根上の突端に位置し、中海から沿岸の地域を広く眺望できる場所に所在する。墳丘の南東から北東側は、道路の建設時に削平され崖になっており、墳形を留めていない。伐採後の等高線や地形測量をみると、斜面は直線的でコーナーを有することから方墳と想定された。古墳の南西側や北東側では明瞭な墳裾はみられなかったが、北東側は傾斜が緩やかになっているところ、南西側は墳端が加工段によって削平されていると考えられたことから、加工段より外側と判断した。また、北西側は、北東、南西両側の墳端角から直線でつないだところを墳端としている。従って、規模は、南西から北東が21.5ｍ、北西から南東が14ｍ以上となり、高さは4.2ｍを測る。墳頂部平坦面は、現況で4.3ｍ×8ｍを測り、南西側から浅い土坑１基を検出している。この土坑については後述する。

墳丘の土層観察では、盛土と思われる土層（第７図９層）を墳頂部平坦面からやや下ったところ、北東側、南西側斜面上方で部分的に検出しているが、旧地表面はみられず、墳丘は基本的に地山の削り出しによる築造と考えられる。しかし、墳頂部は、主体部や墳丘に伴う土層がみられないことから削平されたと考えられ、古墳造成時の墳丘は現況よりも高いレベルに位置していたと推察される。盛土（第７図９層）から土師器の細片（写真図版６）が出土しており、古墳築造に近い時期のものの可能性もあるが、時期は不明である。

本古墳北西側丘陵尾根上を現地踏査したが、明確に古墳と思われるところは確認されなかった。

第２項　SK01（第９図）

墳頂部平坦面で検出した浅い土坑である。下端は一部しか確認できなかったため、土層断面から復元している。全長2.47ｍ、上端幅0.57～0.7ｍ、下端最大幅32㎝、深さ10㎝を測り、主軸方位はＮ－45°－Ｗである。埋土は、地山ブロックを含む橙色土で、遺物は出土していない。SK01が古墳の主体部の可能性はあり、主体部底面の痕跡とすれば、古墳の立地や規模、形、狭長な土坑であること、主体部が墳丘軸線と斜交していることから、古墳時代前半期と推測される。

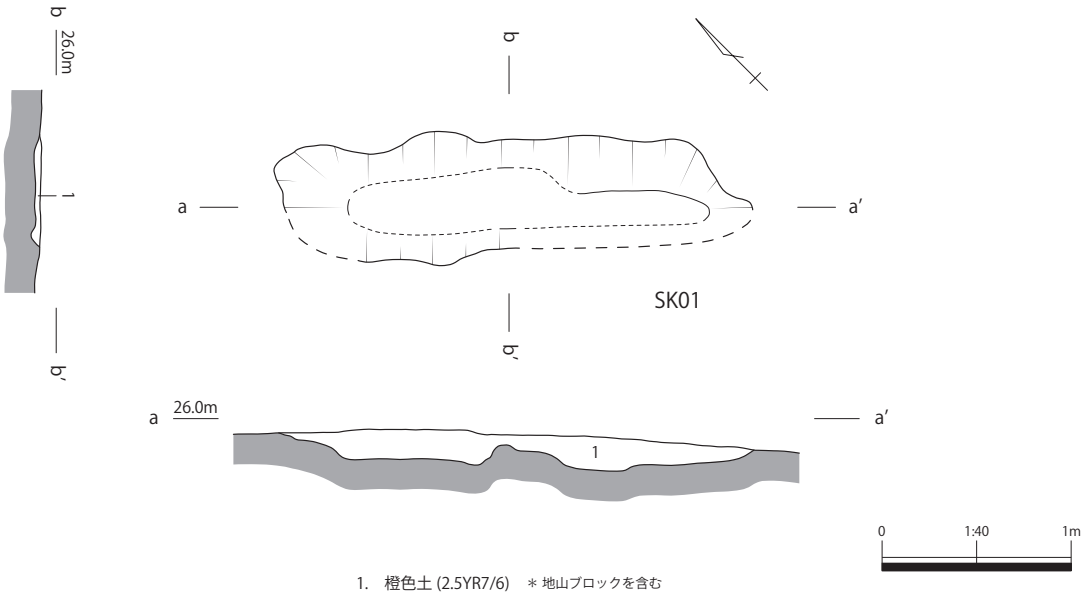
第３項　竪堀１・２（第10図）

竪堀１・２は、調査区北東側斜面で検出した遺構である。墳頂部平坦面からやや下ったところから斜面下方に向かって続いている。

竪堀１は、２本の竪堀のうち西側に位置する。現況で全長5.1ｍ、幅0.4～1.6ｍ、深さ0.26～1.0ｍを測る。地山をＶ字状に掘削し、底面を25～30㎝の幅で平坦に加工している。黄橙色土や橙色土が斜面の傾斜に沿って堆積し、6、7層には炭化物が多くみられた。7層から須恵器の坏蓋片が出土しているが、遺構の時期に伴うものではなく、流れ込んだものと思われる。

竪堀２は、竪堀１の東側に位置する。現況で全長6.4ｍ、幅0.4～3.2ｍ、深さ0.2～1.0ｍを測り、竪堀１との間隔は中心部で4ｍである。断面は、竪堀１に比べると緩やかで逆台形状を呈している。

第 8 図　礫岩古墳地形測量図 (S=1:200)



第 9 図　SK01 実測図 (S=1:40)

埋土は、第 7 図 3 層、浅黄橙色土で、遺物は出土していない。

第 4 項　加工段（第 11 図）

加工段は、調査区南西側斜面で検出した遺構である。丘陵斜面の地山をＬ字状にカットして平坦面を造り、南西側調査区外へ続いている。斜面の勾配をみると、北東側斜面が約 20°であるのに対し、南西側斜面は約 40°と急斜面になっている。

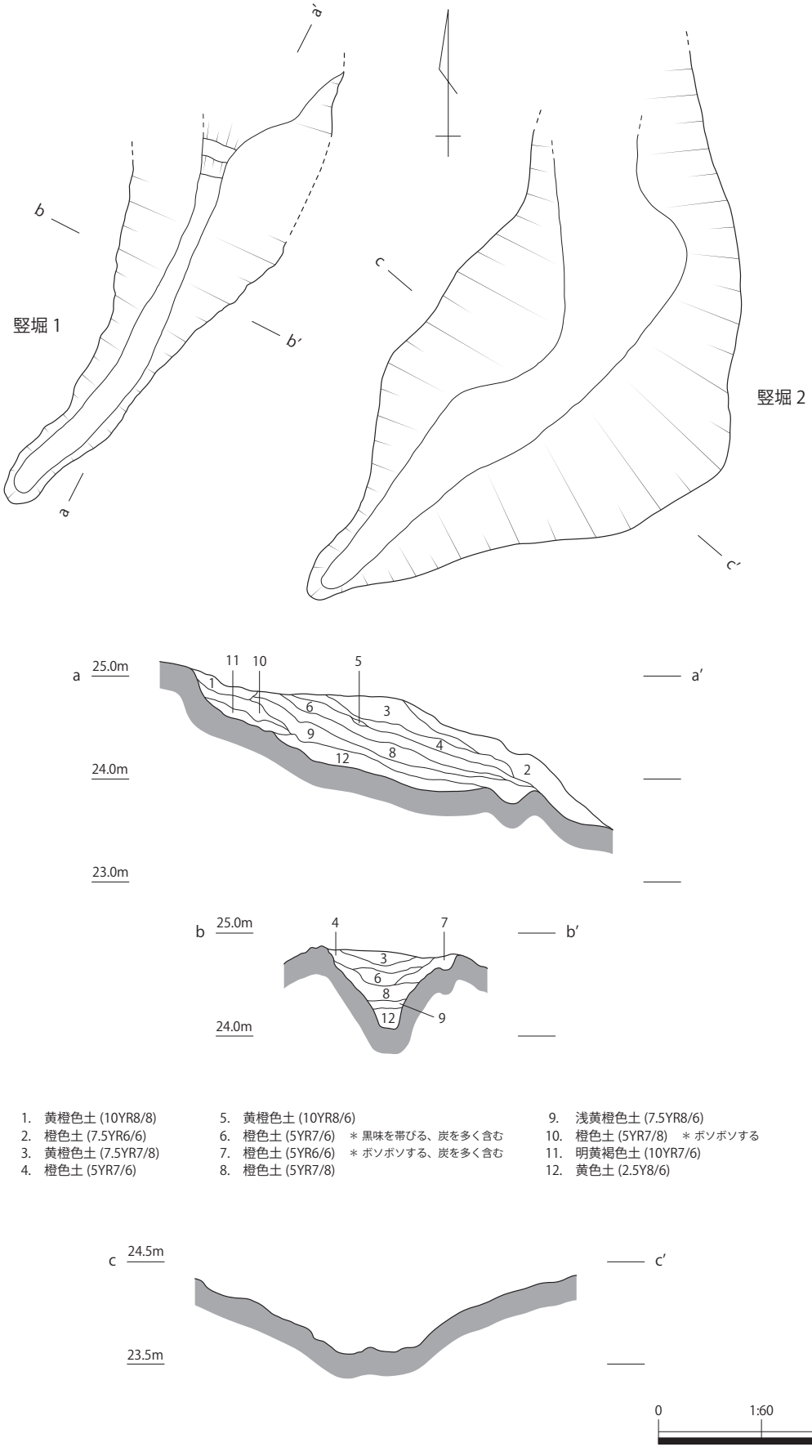
土層は、1、2 層は調査区全体にみられた堆積土（表土と黄橙色土）、3 ～ 6 層は加工段の堆積土である。4 ～ 6 層の堆積後に上面が平坦にカットされ、その後 3 層が堆積した状況がみられる。4 ～ 6 層上面や加工段平坦面から遺構は検出されなかった。また、遺物も出土していない。

この加工段は、斜面の状況をみると、中世の山城における区画、防御のための施設である切岸と思われ、北東側斜面に竪堀があることからもその可能性は大と考えられる。

第３節　遺物（第 12 図）

第 12 図 -1 は、竪堀 1 の埋土から出土した須恵器で、坏蓋の天井部である。外面にはヘラ切りと浅いヘラケズリの痕跡がみられ、出雲編年（大谷編年）4 期の古墳時代終末頃のものと思われる。

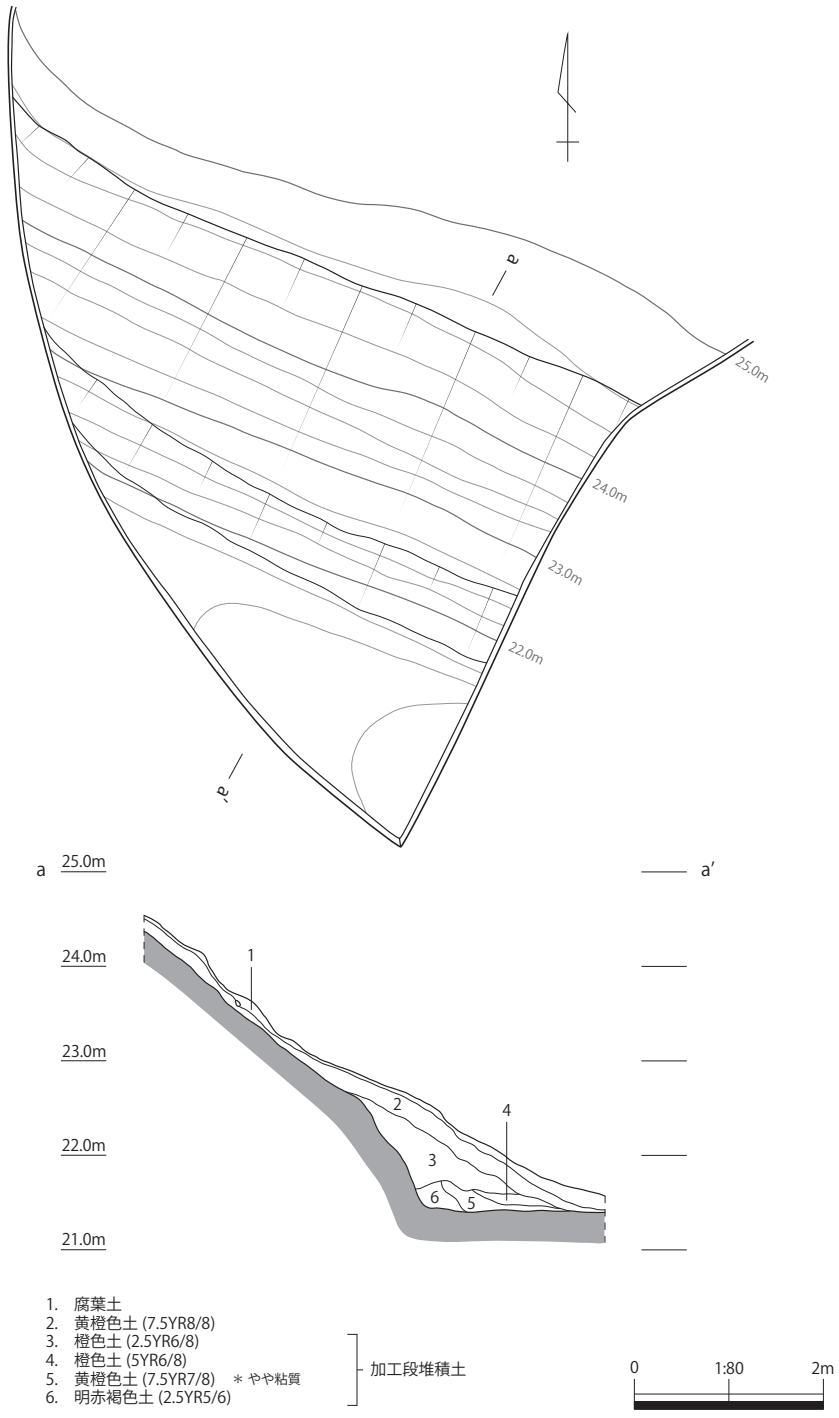
2 ～ 8 は、腐葉土や第 7 図 2 層（黄橙色土）から出土した遺物である。2、3 は須恵器で、2 は高台がつく壺の胴部下半である。調整は、内面に回転ナデ、外面に回転ナデと叩き後のナデを施す。3 は甕片である。4 ～ 8 は陶磁器である。4 は肥前磁器の丸型碗で、外面に襷文が描かれている。5 は肥前磁器の端反りの碗である。4、5 は、九州陶磁器編年Ⅴ期、19 世紀代のものである。6 ～ 8 は在地系陶器である。6 は鉢か擂鉢の口縁部で、端部が玉縁状を呈し、暗褐色の釉が掛かる。7 は布志名焼の碗である。内外面に緑色釉を施し、高台に近いところは露胎である。いわゆる「ぼてぼて茶碗」で、



1. 黄橙色土 (10YR8/8)
2. 橙色土 (7.5YR6/6)
3. 黄橙色土 (7.5YR7/8)
4. 橙色土 (5YR7/6)
5. 黄橙色土 (10YR8/6)
6. 橙色土 (5YR7/6)　＊黒味を帯びる、炭を多く含む
7. 橙色土 (5YR6/6)　＊ボソボソする、炭を多く含む
8. 橙色土 (5YR7/8)
9. 浅黄橙色土 (7.5YR8/6)
10. 橙色土 (5YR7/8)　＊ボソボソする
11. 明黄褐色土 (10YR7/6)
12. 黄色土 (2.5Y8/6)

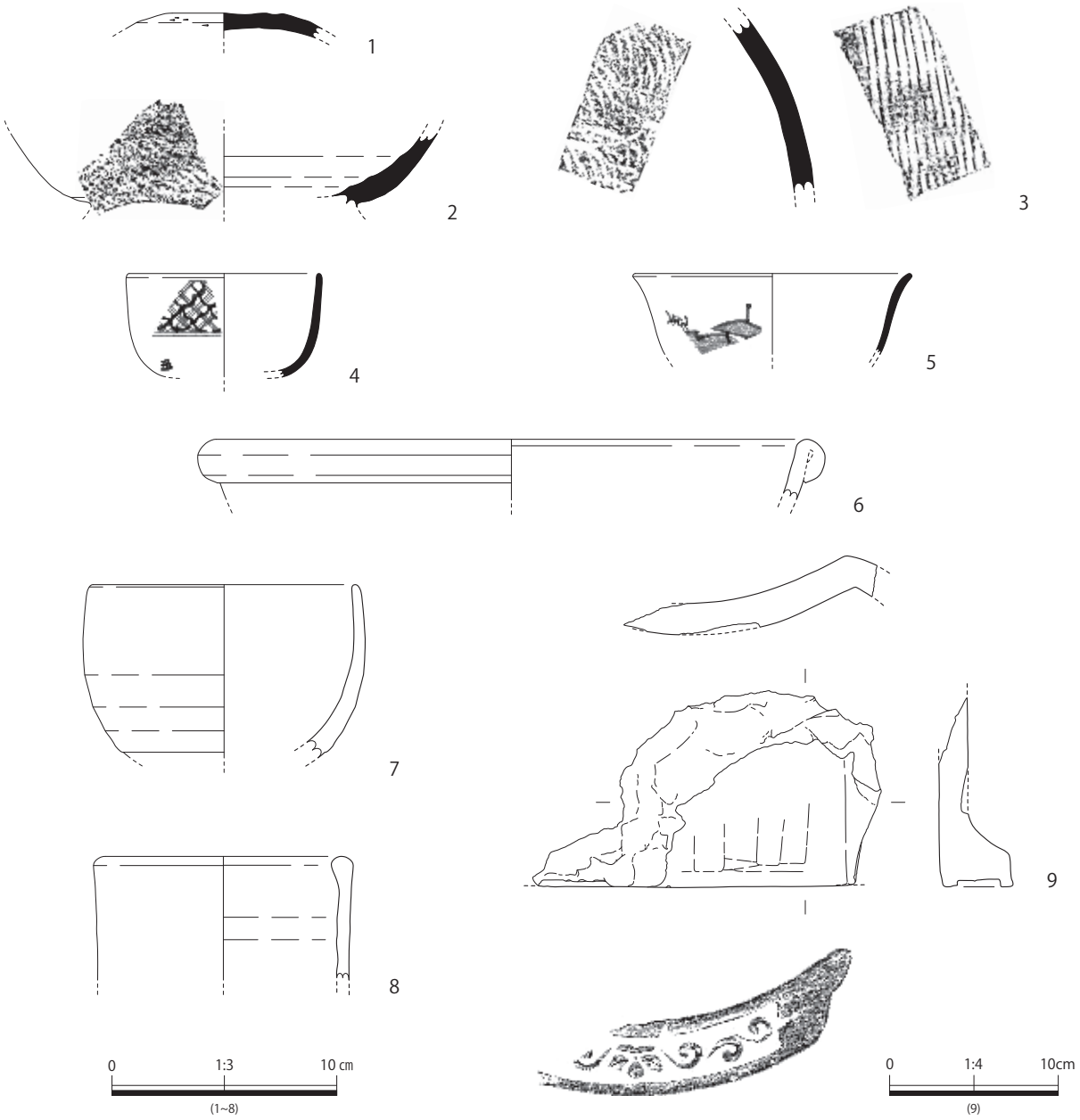
0　1:60　2m

第 10 図　竪堀 1・2 実測図 (S=1:60)



第 11 図　加工段実測図 (S=1:80)

18 世紀後半以降の所産である。8 は火入れで、外面に暗褐色の釉を施し、内面は無釉である。時期は不明である。9 は左桟瓦である。瓦当面の中央飾りは五葉で、下の三葉のみに葉脈が描かれ、上の二葉は繋がっている。外区には、3 回反転の唐草文がみられる。瓦当面の文様は、花谷氏の分類における軒平瓦の五葉 A 類 D に近いが、唐草文が太いことや顎が曲線顎である点は異なる。調整は、凹面にケズリやナデを施している。



第 12 図　礫岩古墳出土遺物実測図 (S=1:3,1:4)

土　器

遺物番号	区	出土位置	出土土層	種類	器種	法量（cm）			調整・手法の特徴・文様	色調	備考
						口径	底径	器高			
12-1	3	竪堀 1	橙色土	須恵器	坏蓋	-	-	(1.0)	内：静止ナデ 外：ヘラおこし、回転ヘラケズリ	内：灰色 外：灰色	古墳時代終末頃
12-2	4	-	黄橙色土	須恵器	壺 （胴部下半）	-	-	(3.3)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、叩き後ナデ	内：灰色 外：灰色	
12-3	4	-	黄橙色土	須恵器	甕	-	-	(7.7)	内：当て具痕 外：叩き痕	内：灰色 外：灰色	
12-4	-	3、4区間畦	表土（腐葉土）	磁器	丸型碗	(8.4)	-	(4.6)	内：施釉 外：施釉、染付、禅文	内：白色 外：白色	九州陶磁器編年Ⅴ期：19 世紀代
12-5	-	3、4区間畦	表土（腐葉土）	磁器	端反りの碗	(12.2)	-	(3.6)	内：施釉 外：施釉、染付	内：白色 外：白色	九州陶磁器編年Ⅴ期：19 世紀代
12-6	-	3、4区間畦	表土（腐葉土）	陶器	鉢か擂鉢	(26.4)	-	(2.7)	内：施釉 外：施釉	内：暗褐色 外：暗褐色	在地系
12-7	4	-	黄橙色土	陶器	碗	(11.7)	-	(7.7)	内：施釉 外：施釉、高台に近い部分は露胎	内：緑色 外：緑色	在地系（布志名焼） 18 世紀後半以降
12-8	-	3、4区間畦	表土（腐葉土）	陶器	火入れ	(10.4)	-	(5.5)	内：無釉 外：施釉	内：灰白色 外：暗褐色	在地系

瓦

遺物番号	区	出土位置	出土土層	種類	法量		備考
					大きさ（cm）	重量（g）	
12-9	3	-	表土（腐葉土）	左桟瓦	長さ（11.2）、幅（20.5）、瓦当高 4.2	530	中央飾りは五葉文だが、上の二葉は一体化している。葉脈あり。3 回反転の唐草文。 曲線顎。凹面にケズリやナデを施している。

第 4 章　総括

礫岩古墳は中海に向けて張り出した丘陵突端に位置しており、墳頂部での標高は 26.0m を測る。北東から南東への眺望がきき、中海中央に位置する大根島や中海対岸の安来市や米子市、その周辺の山々、そして南東に聳える大山を望むことができる。ここでは、古墳の概要に触れ、時代ごとの遺構の変遷をまとめて総括とする。

礫岩古墳の規模は、北東から南西側が 21.5m、南東から北西側が 14m 以上、高さ 4.2m の方墳である。盛土は、南西側、北東側斜面の上方に硬く締まりのある橙色土（第 7 図 9 層）がみられるが、旧地表面（いわゆるブラックバンド）は観察できず、基本的には削り出しによる墳丘と考えられる。墳頂部は削平を受けており、明確な主体部は検出できなかったが、北西から南東方向を軸とする[(2)]土坑（SK01）が存在する。これが古墳主体部の底面とすれば、狭長な主体部であったということができる。中規模な方墳であることや、単独で立地する状況などからも古墳時代前半期のものと判断した。

一方、周辺から出土した遺物は、須恵器の甕片、壺であり、竪堀 1 からは須恵器の坏蓋が出土している。盛土（第 7 図 9 層）から出土した土師器（写真図版 6）については古墳築造に近い時期のものかも知れないが、細片のため時期は不明である。時期のわかるものに須恵器の坏蓋、壺があるが、古墳時代後期以降のものであり、古墳築造の時期よりも新しいものと考えられる。こうした古墳築造の時期より新しい時期の遺物が周辺から出土した例は市域で散見することができ、中竹矢後 1 号墳[(3)]や細曽 1 号墳[(4)]、奥才古墳群[(5)]がみられる。これらの古墳は前半期に位置づけられ、中竹矢後 1 号墳や細曽 1 号墳では、後世における祭祀の可能性が指摘されている。

中世には古墳の北東側に竪堀が掘られ、南西は加工段により著しく改変されている。この加工段は斜面を明らかに削り、その下に平坦面を造り出している。斜面は 40°の勾配をもつ急斜面であり、切岸の可能性が考えられる。同様に古墳を改変した可能性が指摘されている例として、本遺跡の南西側に位置する城山城跡（第 13 図）がある。本調査が行われていないため詳細は不明だが、館跡と思われる平坦地や井戸、櫓台が確認されている。このうち櫓台については、方形の平坦面であることから方墳の可能性が指摘されている[(6)]。当地の立地は先述したように中海沿岸地域への眺望に優れ、日本海から中海、宍道湖への海運や周辺の状況を監視するのに適した場所であり、このことから、山城（砦）として機能していたと考えられる。

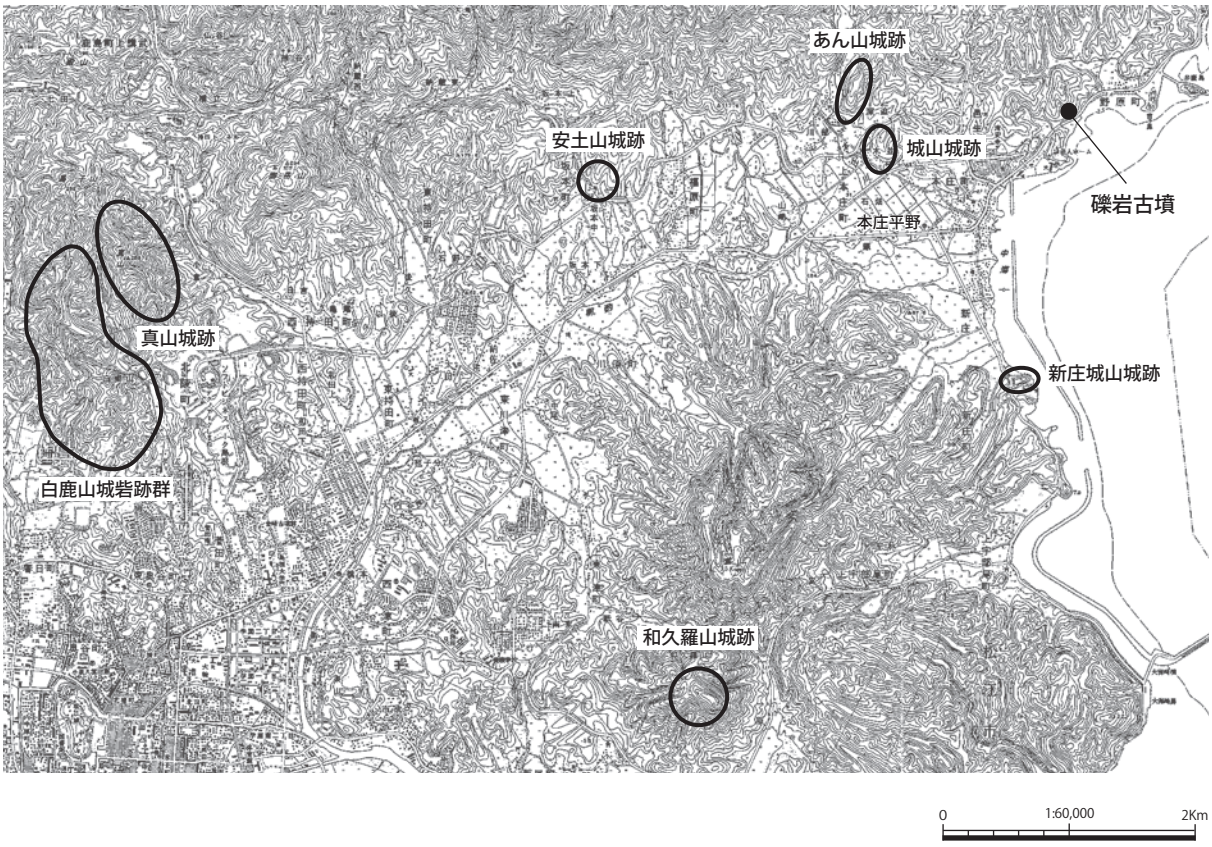
近世には、古墳北西側の周溝部分（未調査地）が松江美保関往還の一部として取り込まれている。野原町の才ノ神と礫岩の字境の峠にあたり、当地には才の神が祀られ、往時には活発に人々の往来があったものと思われるが、現在はかろうじて道としての痕跡を留めているに過ぎない。出土遺物のなかには近世後期の陶磁器があり、付近に建物があったという伝承や、平坦面が残っている。現在の集落は平野部に密集するが、当時は丘陵上も居住域として利用されていたのかもしれない。近世街道の調査は行っていないが、才ノ神の存在から、今後近世街道ルートの特定において重要な指標となることが期待できる。

以上、今回の調査で検出した古墳や竪堀などについて概観した。古墳については遺物が乏しく、立

地から前半期頃のものと想定するしかできなかったが、本調査の少ない当地域において、中海に面した丘陵突端から 1 辺 20m 以上の中規模な方墳を検出したことはひとつの成果といえる。また、前半期とされる古墳から後世の須恵器が出土していることは、古墳への後代の墓前祭祀を考える上での類例となるであろう。

次に本遺跡の特徴として、古墳が中世において改変されたことが挙げられる。竪堀や切岸と考えられる加工段が確認され、立地状況が大きく影響していると考えられた。周囲から際立つ立地を求める前半期の古墳と、周辺を睥睨する目的で築かれる山城（砦）は、往々にして同一の立地となることがあり、今回はそれを確認したものと考えられる。今後の類例の増加により、中世～戦国時代における中海をめぐる当地域での攻防の一端が明らかになることを期待したい。

今回の調査で、本遺跡の古墳時代、中世そして近世の様相を垣間見ることができたことは有意義であり、今後の検証により当該地域史がさらに明確に復元されることを期待したい。



遺　跡　名	標　高（m）	遺 構 の 内 容
あん山城跡	120	郭、堀切
城山城跡	70	館跡、郭、堀切、井戸？
新庄城山城跡	31	郭、土塁、堀切
安土山城跡	80	郭、堀切？、竪堀？、横堀？

第 13 図　礫岩古墳周辺の山城跡分布図 (S=1:60,000)

【註】

（2）想定した方墳の軸よりも 12°北側に振れている。

（3）『中竹矢後 1 号墳　長峯遺跡』 松江市教育委員会　1986 年
中竹矢後 1 号墳は松江市竹矢町に所在する中期の古墳であるが、周溝や墳裾から 6 世紀後半頃から 8 ～ 9 世紀代の須恵器の坏や皿が出土している。

（4）『細曽 1 号墳』 松江市教育委員会　1987 年
細曽 1 号墳は松江市阪本町に所在する方墳で、古墳時代中期頃と捉えられている。古墳の墳裾から 8 ～ 9 世紀代の須恵器の坏が出土している。

（5）『奥才古墳群』 鹿島町教育委員会　1985 年
奥才古墳群は、松江市鹿島町に所在する古墳群である。前期末から後期初頭まで築造された古墳群で、確認されている 68 基のうち 40 基が調査されている。古墳の周辺から、築造時期より新しい 7 ～ 8 世紀代の須恵器が出土している。

（6）『島根県中近世城館跡分布調査報告書＜第 2 集＞　出雲・隠岐の城館跡』 島根県教育委員会　1998 年
本書において、城山城跡の櫓台は方墳（2 基）かもしれないと記述されている。

【参考文献】

島根県教育委員会　2002 年 『馬場遺跡・杉ヶ橈遺跡　客山遺跡・連行遺跡』
松江市　2014 年 『松江市史　史料編 11　絵図・地図』

写 真 図 版

図版1の礫岩古墳遠景　撮影方向Ａ

礫岩古墳遠景（南から）　撮影方向 A

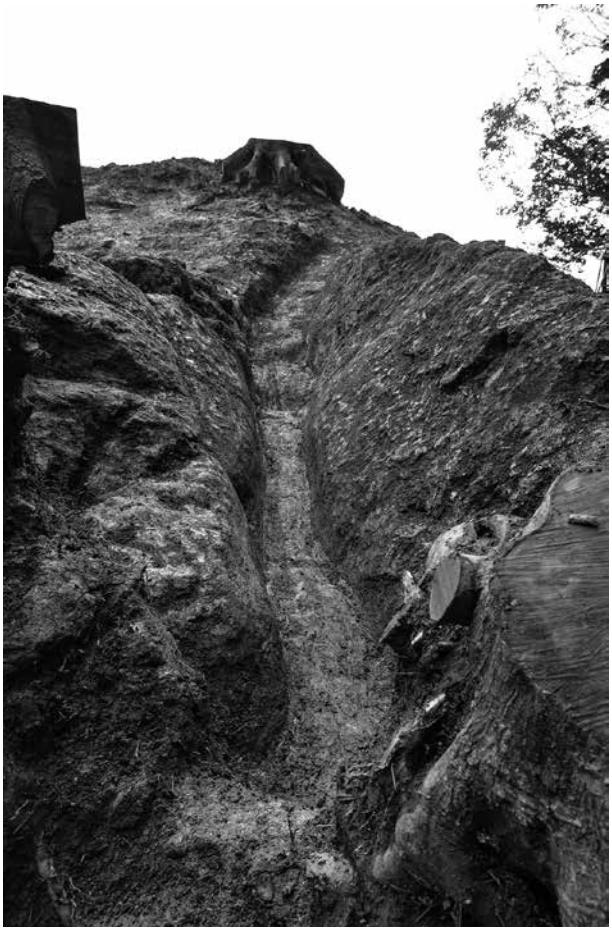
礫岩古墳調査前全景（南西から）

図版 2

墳頂部完掘状況 (北西から)

南西側斜面完掘状況 (西から)

北東側斜面完掘状況 (西から)



竪堀 1 完掘状況 (北東から)

竪堀 2 完掘状況 (北東から)

図版 4

SK01 完掘状況 (北西から)

竪堀 1 南北土層断面 (南東から)

竪堀 1 東西土層断面 (北東から)

加工段土層断面（北西から）

図版 6

＊ 土師器細片（第 7 図 8 層出土）

12-1

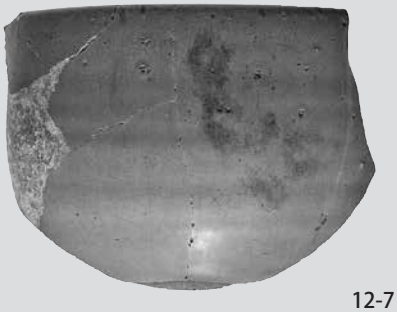
12-2

12-3

12-4

12-5

12-6



12-7

12-8

12-9

礫岩古墳出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	れきいわこふん
書名	礫岩古墳
副書名	一般国道 431 号（野原工区）防災安全交付金（交通安全）工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 183 集
編著者名	廣濱貴子
編集機関	松江市教育委員会 （松江市歴史まちづくり部　まちづくり文化財課　埋蔵文化財調査室） 〒 690-8540　島根県松江市末次町 86 番地　　TEL：0852-55-5284
所在地	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団（埋蔵文化財課） 〒 690-0401　島根県松江市島根町加賀 1263-1　　TEL：0852-85-9210
発行年月日	2018 年 3 月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
礫岩古墳（れきいわこふん）	島根県松江市野原町（しまねけんまつえしのばらちょう）字礫岩（あざれきいわ）586 番地	32201	D-1165	35° 31′ 85″ 133° 08′ 16″	20171025 ～ 20171219	178.0㎡	道路工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
礫岩古墳	古墳 山城（砦）	古墳時代 中世	古墳 土坑 竪堀 加工段	須恵器 瓦質土器 近世陶磁器 瓦	古墳が中世山城（砦）に改変されたことを裏付ける資料

要約	礫岩古墳は、標高 26m に位置する 22m × 14m 以上の方墳で時期は前半期と考えられる。主体部は確認できなかったが、浅い土坑を検出している。古墳は、中世に竪堀や加工段といった防御のための施設が施され、山城または砦として機能していたと考えられる。